

編集室から

先月、静岡まで遠征した金環日食の次は、6月4日の部分月食。その二日後の6日は、朝から昼過ぎまでかけて金星が太陽の表面を移動してゆく金星の太陽面通過と、天文イベントが立て続けました。

日食とは異なり、両日とも見え方に地理的な差はありませんので、金沢から観測するつもりでしたが、4日は厚い雲に覆われ断念。しかし、6日は朝から概ね晴れで、絶好の観測・撮影日和でした。この日、朝7時10分過ぎから13時48分頃まで、6時間40分近くに亘る今回の金星の太陽面横断。昼頃だと、天頂近くなるので、普通の三脚では撮影が難しくなりますので、ポイントはやはり始まりの時刻。

前回の日食用に揃えた機材を早々に構え、機を狙いましたが、金星の移動速度が思ったより遅く、ちょっと朝の用を足しては、カメラをのぞくといった感じでした。

金星の移動に比べ、太陽の移動の方が思ったより大きく、気付くとレンズ自体が太陽から外れていて慌てるなど、素人の「ついで」撮影にありがちなミスも...(^_^;ゞ

そんなこんなで、狙っていたのは、金星が太陽の中に全部入った瞬間。写真のように見事に捉えることができました。目出度し目出度し。



今年はこの後、引き続き10件ほどの天文イベントがあります。向こう10年は、年に1～3件ほどずつしかありませんので、今年はお空が物凄く賑やかな年といえるようです。

父の実家の兵庫県明石市は東経135度ラインがとおるため、昔から天文科学館があり、父によく連れて行ってもらいました。金沢に新しい施設ができたそうなので行ってみようかな(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2012/07
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/uspic>

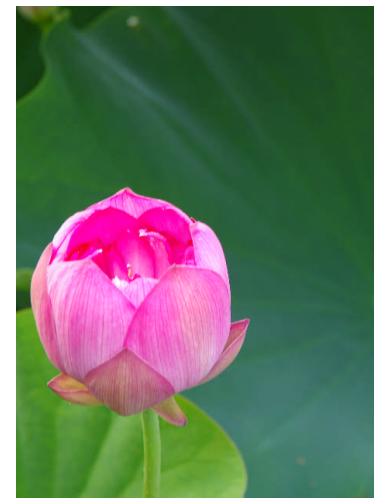
〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email uspic@neting.or.jp



2012/07
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/uspic>

文 月



能登半島七尾市にて
by hama

寄稿『自由なワイン』

ワインアドバイザー 谷村 秋乃

二〇一一年夏、ワインインポーターを退職し、三ヶ月間小さなカバン一つでポルトガル、スペイン、フランス、イタリア、オーストリア、ワイン産地のワイナリーを巡る旅に出ました。観光地とは程遠い、葡萄酒を巡る旅！男女同室ドミトリの安宿や生産者の家に泊まり、まさかの三十歳越えバックパッカー。ガラガラ強烈な太陽に乾いた空気が、収穫を迎えた葡萄をちよいとつまみ食い。笑ってしまいうくらい人情味溢れるバルや食堂の雰囲気。土地の歴史や文化を教えてくれる変わらない古い街。

肌で思いっきり感じられる一人旅ならではの貧乏旅行。そしてやはり人、いつでもどこでも全てはこれに尽きます！

フランスでは幾つかのワイナリーで葡萄の収穫とワイン造りをしながらホームステイ。その中の一つ、ロワール地方のワイナリー、レ・カプリヤードのパスカル・ポテルさんは昔ながらのワイン造りにこだわり、醸造の際に何も加えず、機械での温度管理もせず、自然のままに葡萄の力のみでワインを作っているちよ々と変わったワイン生産者。でもけっこう有名な造り手なんです。

そこでは、毎年お馴染みのキャラの濃い地元のチームが手摘みで収穫。潔癖性かと思うほど永遠に繰り返しされる掃除。そして朝から晩まで注意深く見守りながらも、手を加えず自然に任せられた醸造。

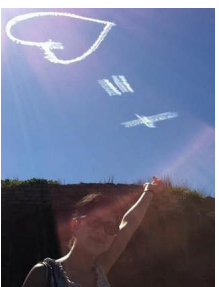
『ファーストフードみたいなワインなんて飲みたくないし、翌日頭が痛くなるワインなんて造らない。家族や自分、友達が飲むために作っているんだ』とワインで顔を赤らめながら熱く語るパスカ

ル。

私は普段ワインボトル半分くらいで翌日ぐったりなのですが、ここで働いていた時は、収穫、醸造の仕事が終わるのが夜中、それから皆で夕飯を食べながら毎日一人一リットルものワインをがぶがぶ飲んでいました。そしてまた早朝からスッキリと起きられちゃうのです。その秘密は酸化防止剤をほんのちよっぴりしか加えないワインだから。そのように造ったワインはデリケートで、扱いに少しだけ気を遣わなければいけません。ワインは生もの、農産物なのです。

ワインは葡萄のみで出来ているのですが、なぜだか造り手に似たワインができてしまうのが面白い。見るからにストイックな造り手のワインはしゃきっと背筋が伸びるような味。ほわっとした雰囲気で冗談が大好きな造り手のワインは柔らかくゆるい味。土地や造り手の人柄を感じられるワインがそこにはあります。

あらゆる情報にまみれ、大量生産のモノに溢れる今日、決められたワイン法に合わず、時にはボトルラベルに記載の制限をかけられても自分たちの信念を貫き、真摯に、自由にワイン造りをしている生産者たちが各地にいます。割と社会の枠に収まらないリベラルな人たちが多い（そこもイイ）そんな彼らのワインたちに魅せられて、これからも小さく自由に発信していきたいなと、パスカルの造った優しく、ほっこりするワインを飲みながらぼんやり思っていました。



【プロフィール】
（たにむらあきの）ワインアドバイザー。ワインインポーター勤務後、現在ワイン会主催やコーディネート。今秋、金沢でワインバー「こわん・La lune de coin」を開店予定。

濱のつぶやき 『視点』

「今朝、起きてから此処に来るまでの間、一輪でも花を見かけませんでしたか？」

講演やセミナーの冒頭に、ほぼ必ずこの問いかけをする。

道端の雑草も含め、花は必ずどこかに咲いている。その花が見えるかどうかは、それを意識に止める「見渡しと、心構え」があるかどうかにかかっている。

企画や政策立案の現場に長くいると、期限までにどれだけ内容の高く濃い成果が出せるか、いつもプレッシャーとなっていた。一方で、その解決策・打開策のヒントは、思わぬところから現れることも経験した。ヒントは何処にもある。ヒントとなる情報を見逃す事の方が、問題は深刻であると、ある時気付いた。それ以来、この冒頭の問い掛けを定番とするようになった。

「問題」を感じるとき、その大きさ・深刻さによっては、解決策がまるで見つからないような気に陥る。時と人によって、「問題の種類」は異なるが、ひどい時には、このまま問題がなくならない気になるから不思議だ。

そんな時、ふと「そこ」から意識を離すことができたなら、今ほどまで見ていた「地獄の絵」は、未だ見ぬ可能性の一つに過ぎないことに、気付く。すると、成績のV字回復も、突然の大求愛も、天から降ってきたような名誉も、すべてが同じ可能性の一つであることにも気付ける。

さらに、視野を広げられるなら、今この瞬間にも応援の風や、陰で支えようとしてくれる存在や、ひっそりと気遣ってくれている心にも気づくことができる。孤立無援ではない！そう気付けたなら、また一歩、歩幅は小さくとも、歩み始めることができるのではないか。

最近、真のリーダーにナビゲートする研修を依頼されることが増えてきた。

真のリーダーとは、どんな人だろうか…。

それは、自らを救える人のことだろうか…。

如何にして、「今の状況」に囚われている意識を「今の状況」から切り離して「鷹の眼」に瞬時に切り替えられるか…。この能力に掛かっているように思う。

それは、どうしたら伝えられ、どうしたら身に付けてもらえるのだろうか。

研修で責務を全うするには、さらに問いかけが続く。

会社再建途上、私の身に3つの悲劇が訪れた。今となっては喜劇と言うほうが適切かもしれないが、いずれも尋常ではない出来事であったのは確かである。

その1。気がつくとも床が垂直に立っていた。白いセラミックが目の前にあった。恐らく数十秒、眼球以外は動かさなかった。こういう時、事態を把握するまではとりあえずじっとするという防御反応が働くみたいだ。西武池袋線古田駅近辺のウイークリーマンション¹、座って用を足そうとした矢先に意識が遠のいた。どのぐらいの時間、気を失っていたのかわからないが、怪我也汚れもないことを確認しパンツを上げた²。

翌朝、普通に出勤し昨夜のことを冗談まじりに話すと、いつもは意見の合わない総務の2人が「すぐ病院へ」と口を揃えて言う。それまでたかをくくっていたのだが、「倒産事件では当事者のうち何人かが必ず倒れる」と弁護士が言っていたのを急に思い出す。会社近くの総合病院へ行き、脳の断面を撮ってもらったが、後日、「綺麗な脳です」と言われあっけなく無罪放免。原因はよくわからないが、2006年2月、当時の私は無自覚のまま、実は危ない状態だったのかもしれない。

その2。気がつくとも一気に飲み干そうとしていた。民事再生突入前の2005年9月、本社の一番奥の隔離された空間に我々はいた。債権者が突然訪れても気付かれない場所に。この“作戦会議室”は、情報収集、資料作成、そして全ての重要な意思決定が行われる静かな戦場であった。その時、視線を手元に置いたまま、対面の社長が灰皿代わりにしていた缶コーヒーに、私の左手が伸びた。その円筒には液体が少し残っていて、その微かな重みを察知した左手は、オートマチックに飲み干す角度をつけていた。「あっ」と言う社長の声と同時に舌が違和感を検出、琥珀色の液体はかろうじて食道の手前で踏み止まった。飲み込んでいたかと思うとぞっとする。

その3。気がつくとも口の中を固いコーンが泳いでいた。総務部の2人と飲んでいたときのこと、実務にて過度の負担が集中していたスタッフが、総務部長に対して日頃の不満をぶちまけている傍らで、1本の歯が痛みもなくあっさりとはげ、まるでコーンのように口の中を転がっていた。出血もなく大げさにすることもされることもなく、コーンどころではない口角泡を飛ばすような話が延々と続き、私は開いた穴を舌で確かめながら2人の溝を埋めようとしていた。ちなみに、民事再生手続の期間中、歯茎に加え毛根も大きなダメージを受けたが、これらと民事再生手続の因果関係は証明されていない。

非日常的なエピソードが我々の身に次々と降り掛かっていた。当時はこれらが霞むほどの事件に連日直面していたので、それほど深刻に捉えることなくやり過ごしていた。結果として、私を含めた全ての関係者が今日も普通に暮らせていることに感謝をしたい。

1：当時の我々は賃貸契約の審査が通らず、気分転換も兼ねてホテル等を転々としていた

2：起き上がったから次の日の朝までのことは覚えていない

自宅が駒沢公園に通じる駒沢通り沿いにあるということで、朝昼夜問わずたくさんのジョギング愛好者(ジョガー)を多く見かけます。

また私の周りでも最近「駅伝」、「市民マラソン」、中には強者もいてアイアンマンレースと言われる「トライアスロン」をやりはじめた人間もいます。

私の生活と言えば、起きてから自宅で経営者や企画マンの仕事をし、夜はお店で接客。時折馴染みのお客様との懇親を深めるためにお酒を少々。

店舗立ち上げの準備をはじめてからのこの2年はっきり言ってまったく運動らしい運動はしていません。信号の変わり目で走ることすら億劫になってきているような状況です。先日の健康診断では、とうとうメタボ検診で「C」判定。つまり、メタボになりつつあるというありがたい評価をいただきました。

恐らくサラリーマン時代に着ていたスーツも今着たら随分シルエットが変わってそうです。以前はどんなに飲み食いしても太らなかったのに。これがオジサン化ということなんですね。

そんな私から見て無駄なお肉がそぎ落とされたスリムな体で軽やかに風をきって走り抜けるジョガー達は羨望の的です。

私も高校時代は部活で毎日5キロは走っていたものですが、それはあくまでも一緒に走る仲間がいることの連帯感や、やらないといけないという義務感だったかなあ。正直あまり楽しい作業ではなかったです。

ですが、近所を駆け抜けるジョガー達はみんな苦しい顔なんて見せません。清々しいのです。

何が彼らをそうさせるのでしょうか？

健康になりたい、痩せたいという目的(強迫観念?)からでしょうか。そうだとしたらあんな清々しい顔はしないでしょう。

何かその行為自体が楽しいのでしょうか。こればかりはやってみないとわからないので、本日6/25から夜お店から自宅の帰路をジョギングで帰ることにします。何かが変わるのかな!?

1か月後が楽しみです。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

掛川建築文化研究会の建築探訪の旅「K A I T工房他」2012.6.9
静岡県職員 溝口 久

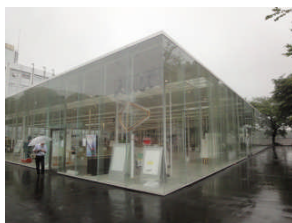
久しぶりに建築を見ることを主体にした旅に出た。かつては建築のパートナーの久保さんと熊本アートポリスはじめ建築を巡る旅をしていた。最近では「食」「地域プロデュース」をもっぱら旅のテーマとし、先方にお相手して下さる方がいて、その地域文化・人情に溺れる旅の過ごし方をしている。

今回は建築の仲間である「掛川建築文化研究会」の面々と車に乗り合わせ、神奈川・東京に向け雨の中を旅に出た。

「誰だ、雨男は！」恨めしく仰いだ天は分厚い雲に覆われ、今日一日分は十分に雨を降らす水を蓄えているようだった。掛川ICから東名高速道路に入った。新東名ができてから4割ほど交通量が減り、水しぶきを上げながらも快調に車は走って行った。日本平のSAで早くも休憩、「え！もう休むの？それより早く目指す建築に会いに行きませんか！」その後も休憩頻度が多い、どうもトイレに用事があるのではなく、煙に餓えた人たちが補充を必要としていることがわかった。何しろどこでもいつでも喫えるという環境は失われているから、無理からぬ現象か。

一向に止む気配のない雨の中、厚木ICから一般道に入り最初の目的先である神奈川工科大学（旧幾徳高専）に向かった。

車を止め、降りしきる雨のキャンパスを歩き進むと突然目の前にこれまで見たこともない軽やかな空気さなぎのようなガラスのボックスが現れた。軒も樋も持たないそのボックスは大量の雨を片方に流し、透明なガラスの壁面を滝のように流れ落としている。裏口にあたる扉上には庇がなく、流れ落ちる雨に入場を阻まれるほどだ。



これが2009年に建築学会賞をとった石上純也氏の設計によるK A I T (Kanagawa Institute of Technology)工房。平たく言えば工作室だ。金属加工、鍛造、陶芸、レーザー加工、木工加工、PC連動機械などが設置されている。

小生が今から遡ること35年ほど前、沼津高専機械工学に席を置いていた当時の機械工作実習室は、金属の切削加工時に出る熱で高温になった刃物を冷却するために浴びせる油が蒸発する匂い、鍛造でコークスが赤々と燃える匂い、鑄造でどろどろに溶けたアルミの湯が発する匂い、木工旋盤が発する木

の焦げる匂い、

アーク溶接が放つ危険な光、エアハンマーが真っ赤になった鉄をたたく衝撃音など、ものづくりの時に発せられる現象に満ち溢れていて、まさに工場だった。

目の前にあるK A I T工房は工場とは一線どころか二線を画す建築だ。

『森の中でのものづくり』のコンセプトのもとに壁のない2500㎡の空間に、ランダムに白く塗られた鉄のフラットバー状の柱が林立する。矩形を形づくるように規則正しく立っているのが柱の姿だが、ここは違う。疎であったり密であったり、フラットバーの向く方向もまちまちで、おのおのが垂直荷重、水平荷重を分担している。それにしてもスレンダーなその柱の群は空間に浮遊感をもたらしめている。



中には工作機械もテーブルもちょっと講義スペースも用意されなければならないので、柱の位置は相当量の検討があったであろう。それでも携帯の画面を見ながら歩いていようものなら、容赦なく目の前にその白い鉄の板が現れ、痛い目に遭うことになるだろう。

また、ガラスのカーテンウォールやガラスの屋根は日射熱の入射、夜間・冬場の放熱に対して何ら抵抗力を持ち合わせていない。屋根はそれでもガラスとデッキプレートが交互に張られてはいるが、ガラス部から入る日射は遮ることもできず中で陽を避けて作業場を移動するというから並みではない。ガラス部にはクロスを張って抵抗の跡が見られるが夏場の使用は避けたほうが身のためだろう。



この厄介な建築は中にいる人のために心地よく快適な建築という機能を持った箱ではなく、立体アートといっても言い過ぎではあるまい。それでもこのガラスの宝石箱を持ち、使う喜びがあるような気がする。住むことが戦いのような安藤忠雄の住吉の長屋を思い起こさせられたのは何も私だけではないだろう。

この工房の利用は日曜日を除き10:00~21:00で、6名の指導員と学生アルバイトでものづくりを支援する。「ものづくりの夢を実現させる目的で設立」に違わぬハードそしてソフトになっていた。

K A I Tを後にし、次は東大の福武ホール、木質シェル構造の弥生講堂、T O T Oギャラリー間、表参道ヒルズと建築探訪の旅が続いた。

(おしまい)